会話における発話の音声重複と共同発話文

木　林　理　恵

はじめに

共同発話文とは、話者Ａが「男性はあまり」と言った後に話者Ｂが「いないですね」と続けるように、2人以上の話者が1つの文を作るような現象である（木林2020）。本稿では、共同発話文が起きた際に話者同士の音声が重複する現象に焦点を当てる。共同発話文も会話の音声重複も、それぞれ分析者の観点に応じて語用論的、相互作用的研究がなされてきた。本稿では音声重複の先行研究にならい、「唱和」「斉唱」といった表現で表されるような、話者が同じ表現を使って同時発話を行った現象を共同発話文という観点から再考する。また、会話の基本情報（木林2016）という考え方を分析対象の考察に活かすことができるかを試みる。

1．先行研究

共同発話文、発話の音声重複、及び、会話の基本状態について述べる。

1.1. 共同発話文

共同発話文[1)]という現象は、水谷（1993）が相づち等とともに「共話」と名付けた会話のスタイルの1つとして、日本語における協調的な言語行動として様々な観点から多元的に分析、考察されてきた。

語用論的、相互作用的研究の観点から、共同発話文は、情報の確認・説明を助ける・共感的に理解を示す、といった機能が多く示され、基本的に協調的な言語行動として捉えられている。その一方で、先の話者の発話の方向性を変えたり、反対の立場を示したりするような発話も報告されている[2)]。

木林（2020）は、ディスコース・ポライトネス理論（宇佐美2008等）における会話の「基本状態」という概念を用いて共同発話文を一元的に捉え、それが会話における効果的な「有標行動」であることを指摘した。生起率が数%程度と低いことや、話者交替は基本的に相手の発話に構造的につなげる形で行われていないことから、共同発話文はその会話の無標とされる行動ではないと位置づけることができる。そのため「基本状態」から離脱した行動と解釈でき、ゆえに、従来の研究では有標行動としての効果が様々に論じられてきたと考えられる。

ただし、このように捉えたとしても、協調的な言語行動とは異なるように見える共同発話文をどう解釈するかは難しい。

1.2.発話の音声重複

会話における発話の音声重複は、話者交替の移行適切箇所という観点から分析が行われてきた。発話の音声重複は話者交替がうまく行われなかったと捉えられ（Sacks1974）、会話分析（CA）や相互行為分析といったジャンルでは、音声重複がどのように生じ、処理されるかということが扱われてきた。竹田（2016）によれば、話者交替時の音声重複は解消すべきものだという観点の研究もあるが、音声重複に会話の文脈上の必然性を読み取ろうとする研究もある。菅原（1996）は「発話ターンが交替して会話が進んでいく」という考え方を相対化して捉えることを示している。また、竹田（2016）は、話者交替の有無に関わらず、単語や文を同時に発話するものとして重複発話を定義し、協調的相互行為を包括的に捉えている。

音声重複の研究では共同発話文もしばしば取り上げられる。共同発話文は話者交替時に起こるからである。例１に、後続発話が先行発話に音声を重ねるだけでなく、発話の表現もほぼ同じであった場合を示す。

例1：心理学のゼミについて

発話文番号	話者	発話内容
38-1	母語	《沈黙3秒》わたしの友達で心理の、大学院に行っている人が、いるけどその人はやっぱり臨床心理士に<なりたいとか>[<]„
39	日本人1	<なりたいって>[>]。←
38-2	母語	言って、うーん。

このような発話は、共同発話文のように2人以上の話者が1つの文を作るという観点だけではなく、同時発話という観点から研究されている。

音声重複も協調的な言語行動として捉えられ、分析される傾向にある。菅原（1996）は、話者には「相手のことばに唱和しようという志向性」があり、それは「協調的同時発話」という類型を生み出しうると指摘している。そして、相手の発話の末尾の語やフレーズをほぼ同時に発話したり、相手とまったく同一の文を同時発話したりすることを「唱和」と呼び、異なる文を同時発話するオーバーラップと表現上区別している[3)]。串田（2006）は「言葉を重ね合わせる工夫によって首尾よく実現されたもの」

としての言葉の一致を「ユニゾン」と呼んでいる。菅原も串田も、話者が相手の言葉に合わせようとしている、という観点からこの現象を分析している。内田（2016）は同一表現で音声重複が起きた場合を「斉唱」と呼び、菅原の「相手のことばに唱和しようとする志向性」がどのように表れるかを詳述した。また、重複発話は協調的な雰囲気を創出することに貢献していることを明らかにしている。

1.3.会話の基本情報

会話全体の発話の量、会話における各話者の発話の割合、話者交替数といった情報は、「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese、以下BTSJ）」（最新版は2019年版、宇佐美2020）に従った自然会話資料を用いることで算出しやすくなる。BTSJは、会話を定量的・定性的双方の観点から分析できるよう開発された文字化システムであり、発話文という分析の単位が設けられている。つまり、文字化資料を作成する際に記載する情報から、会話自体の特徴を捉えることが可能である。

BTSJの開発者である宇佐美は、社会人の初対面二者間会話72会話の冒頭部3分間について、各話者の発話文数や話者間の発話文数のバランス等の基本的要素の分布を記述、考察している（Usami2002）。それによると、同年齢の話者同士の会話では総発話文数が他の会話（年上との会話・年下との会話）より有意に少ないことから、同年齢の話者同士の会話は他の会話より発話文が比較的長いと考えられる。また、各話者の発話文の割合は50%前後でバランスが良いことから、適度に話者交替が行われていると解釈している。

木林（2016）は、日本語母語話者同士の会話と日本語母語話者－非母語話者間の会話の特徴を比較した。会話時間を揃えて発話文数と話者交替数を見ると、日本語母語話者と日本語中級話者の会話は一発話文が比較的短いものの、一人がいくつかの発話文を続けて話すことが多いことから、他の会話と比べて話者交替が少ないと考えられる。一方、日本人同士の会話は一発話文が比較的長く、非母語話者との会話に比べて話者交替が多く行われている、と解釈した。

ディスコース・ポライトネス理論にある会話の「基本状態」という概念を援用すると、会話にはそれを構成する基本的な状態がある。本稿では共同発話文における音声重複を扱うため、会話全体の音声重複の生起率を会話の基本情報と捉え、共同発話文と関連付けて考察することを試みる。

1.4.研究課題

本稿では、定量的には、話者交替時の共同発話文、会話全体における音声重複の生起率、音声重複が起きた共同発話文の割合を求める。また、定性的には、相手に対する理解を示すことがどのように行われているかを、音声重複箇所に同一の表現が見られる「唱和」（菅原1996）の観点から考察する。

2. 会話データとコーディング

以下では、分析に用いた会話データ、及び、コーディングについて述べる。本稿では、会話の基本情報の他、話者交替時の音声重複、共同発話文の頻度と割合を算出する。

2.1.会話データの概要と文字化の原則

BTSJに従って文字化し、整備された会話データを用いる[4)]。データは、日本人5名（以下、日本人1～5）が、日本語中級話者、日本語上級話者、及び日本語母語話者という3通りの相手と雑談した全15会話である（以下、中級話者、上級話者、母語話者と記す）。状況は初対面で、会話参加者は全員、東京の大学に在籍する20歳から23歳の女性である。日本語非母語話者（中級話者、及び、上級話者）は2名とも台湾出身で、録音時の連続在日期間は、中級話者が9ヶ月（1年間の交換留学コースに在籍）、上級話者が1年3ヶ月（大学院に在籍）であった。会話の長さは1会話平均16.4分、15会話の合計は4時間12分35秒である。

表1：会話データにおける話者の組み合わせ

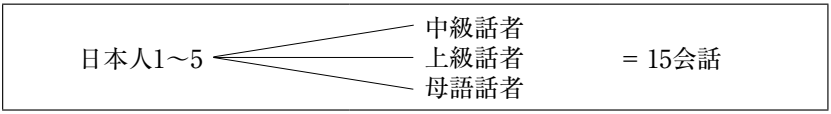

表2に各会話データ会話時間数と総発話文数、話者交替数[5)]、及び、表3に各会話の話者ごとの発話文数と割合を示す。

表2：3種類の会話の会話時間数と総発話文数

	日本人－中級	日本人－上級	日本人－母語
会話時間数	88分17秒	84分29秒	82分49秒
総発話文数	2704	2228	1895
話者交替数	2442	1937	1804

表3：3種類の会話の話者ごとの発話文数と割合

	日本人－中級	日本人－上級	日本人－母語
日本人（割合）	1327 （49.1%）	1148 （51.5%）	917 （48.4%）
対話者（割合）	1377 （50.9%）	1080 （48.5%）	978 （51.6%）
総発話文数（割合）	2704 （100.0%）	2228 （100.0%）	1895 （100.0%）

表3から、各話者の発話文数は50%前後であり、バランスよく会話が行なわれていることがわかる。

本稿では、話者交替数を基に、共同発話文、音声重複の生起率等を算出する[6)]。

2.2.コーディング

2.2.1 共同発話文

共同発話文は「複数の話者によって構造的に完結される1つの文」と定義し、先の話者の発話を先行発話、後の話者の発話を後続発話と呼ぶ（木林2020）。例えば以下例2の会話では、日本人1の発話文番号111-1「かえって国内の方が」が先行発話、母語話者の112「高かったりね」という発話が後続発話となる。

例2：旅行先は海外か国内か

発話文番号	話者	発話内容
111-1	母語	かえって国内の方が,, ［先行発話］
112	日本人5	高<かったりね>{<}。 ［後続発話］
111-2	母語	<物価高い>{>}から。

共同発話文の生起頻度は、発話文番号112のように後続発話とみなされる発話文を数える。

2.2.2 話者交替時の音声重複と「唱和」

BTSJによる文字化資料は、音声重複が起きた場合にそれを記号で示す。上記の例2で示した発話文番号112「かったりね」と111-2「物価高い」の部分は、音声重複が起きた箇所である。例2の場合は共同発話文が起きたとき（発話文番号111-1と112）に音声重複は起こっていない。一方、例3では後続発話が先行発話に構造的につながるように重ねられており、このような場合を音声重複を伴った共同発話文とみなす。

例3：英語の教員免許について

発話文番号	話者	発話内容
96	上級	あ、あの英語を教えー、る人は必ず英語、しっ専攻の人<でなくてもいい>{<}。［先行発話］
97	日本人4	<でなくてもいいです>{>}。［後続発話］
98	上級	あ、そうですか。

発話文番号97のような発話を数えることで、会話における音声重複の量を算出することができる。

さらに、この例3や例1のように音声重複箇所に同一の言葉が見られる場合を「唱和」（菅原1996）として考察の対象とする。

3. 結果

以下に定量的な分析の結果を示す。

表4では、話者交替数を基に共同発話文の生起率を算出した。

表4：「日本人－中級」、「日本人－上級」、「日本人－母語」会話における話者交替時の共同発話文の頻度と割合

	日本人－中級	日本人－上級	日本人－母語
話者交替時の共同発話文の頻度（割合）	51 （2.1%）	34 （1.8%）	41 （2.3%）
それ以外の話者交替の頻度（割合）	2391 （97.9%）	1903 （98.2%）	1763 （97.7%）
話者交替合計（割合）	2442 （100.0%）	1937 （100.0%）	1804 （100.0%）

話者交替に基づく共同発話文の生起率は2%程度であった。発話文を基にした先行研究でも生起率は数%程度であり、決して高くないと言える。

また、各話者が後続発話を発した割合を表5に示す。日本語力が中級程度の話者でも、相手の発話に構造的につなげる発話を行っていることがわかる。

表5：「日本人－中級」、「日本人－上級」、「日本人－母語」会話の共同発話文における各話者の頻度と割合

	日本人－中級	日本人－上級	日本人－母語
日本人（割合）	45 （88.2%）	21 （61.8%）	28 （68.3%）
対話者（割合）	6 （11.8%）	13 （38.2%）	13 （31.7%）
話者交替の合計 （割合）	51 （100.0%）	34 （100.0%）	41 （100.0%）

表6に、各会話において話者交替時に音声重複が起きた頻度と割合を示す。

表6：「日本人－中級」、「日本人－上級」、「日本人－母語」会話において話者交替時に音声重複が起きた頻度と割合

	日本人－中級	日本人－上級	日本人－母語
話者交替時に音声重複が起きた頻度（割合）	434 （17.8%）	249 （12.9%）	654 （36.3%）
それ以外の話者交替の頻度（割合）	2008 （82.2%）	1688 （87.1%）	1150 （63.7%）
話者交替の合計 （割合）	2442 （100.0%）	1937 （100.0%）	1804 （100.0%）

表6を見ると、話者交替時の音声重複は、日本語非母語話者との会話では10%台であるのに対し、日本語母語話者同士では36.3%と比較的高い。表7に、どちらの話者が音声重複をさせたか、その頻度と割合を示す。

表7：「日本人－中級」、「日本人－上級」、「日本人－母語」会話の音声重複における各話者の頻度と割合

	日本人－中級	日本人－上級	日本人－母語
日本人（割合）	251 （57.8%）	141 （56.6%）	358 （54.7%）
対話者（割合）	183 （42.2%）	108 （43.4%）	296 （45.3%）
話者交替の合計 （割合）	434 （100.0%）	249 （100.0%）	654 （100.0%）

発話文単位でみると各会話の発話文の割合は50%前後で（表3）バランスがよいが、発話の重複の割合は少し傾向が異なり、日本人ベース話者の割合がやや高い。表8に、各会話の共同発話文における音声重複の頻度と割合を示す。

表8：「日本人－中級」、「日本人－上級」、「日本人－母語」会話の共同発話文における音声重複の頻度と割合

	日本人－中級	日本人－上級	日本人－母語
共同発話文における音声重複の頻度（割合）	12 （23.5%）	9 （26.5%）	18 （43.9%）
それ以外の共同発話文の頻度（割合）	39 （76.5%）	25 （73.5%）	23 （56.1%）
共同発話文の合計 （割合）	51 （100.0%）	34 （100.0%）	41 （100.0%）

表8を見ると、先行発話に音声を重ねる形で発話された後続発話の割合は、「日本人－中級」23.5%、「日本人－上級」26.5%、「日本人－母語」43.9%であった。それぞれ、会話全体における音声重複の割合より高くなっている。表9に、どちらの話者が音声重複をさせたか、その頻度と割合を示す。

表9：「日本人－中級」、「日本人－上級」、「日本人－母語」会話の共同発話文の音声重複における各話者の頻度と割合

	日本人－中級	日本人－上級	日本人－母語
日本人（割合）	11 （91.7%）	4 （44.4%）	8 （44.4%）
対話者（割合）	1 （8.3%）	5 （55.6%）	10 （55.6%）
話者交替の合計 （割合）	12 （100.0%）	9 （100.0%）	18 （100.0%）

中級話者は、後続発話という形で音声を重ねることが少ないことがわかる。

4. 考察

共同発話文の生起率は数%程度であり、話者交替時における「有標行動」であると解釈できる。基本的に、相手の発話に構造的につなげるような形で話者交替が起こる割合は低い。

また、会話全体で話者交替時に音声重複が起こる割合は、中級話者との会話では17.8%、上級話者とは12.9%という一方で、日本人同士の会話では36.3%であった。同じ初対面でも、話者の背景によって音声重複の生起率が異なる。

共同発話文が起きたときに音声重複を伴った割合は、中級話者との会話で23.5%、上級話者とは26.5%、日本人同士の会話では43.9%で、会話全体での割合よりも高かった。また、後続発話の始まりは先行発話に重なっていなくとも、その途中で先行話者がさらに話し始め、発話が重なる談話も見られた。会話の基本状態という概念を考えると、音声重複は、共同発話文という個別の現象においても会話全体での割合を反映した数値になるのではないかと推測できる。しかし今回のデータでは共同発話文が起きたとき、会話全体よりも音声重複が起こる割合が高くなっている。会話の基本状態と個別の現象の関係は引き続き考察していきたい。

以降では、「唱和」が起きた共同発話文について菅原（1996）が示した「〈わかりあい〉の過程」という観点から談話例を見ていく。

4.1.話者の協調的な言語行動と「唱和」

共同発話文は、Sacks（1992）の「理解」に関する議論にあてはめて考えると、相手の言いたいことを理解したことを示すという働きを持つと

解釈できる。Sacksは「自分の理解を示すやり方は、なにかがなされたとき、それにちょうどふさわしいと思うことをやってみることである（西阪1997: 171、Sacks1992: 113の訳）」と述べており、後続発話はまさに「それにちょうどふさわしいと思うことをやってみること」だと言えよう。菅原（1996）も同様に、「〈わかりあう〉という課題は『知っているか・いないか』にかかわらず果たされなければ」ならず、「〈わかりあう〉ことの証は『相手が言おうとしていることを言う』ところから得られる」と述べている。

一方で、先行研究では理解の表示とは異なるような談話も報告されている。例えば、相手の言おうとしたことをとったような発話や、相手の発話を利用して自分の言いたいことを言っているように見えるものである。

ここでは、先行発話の内容が質問であり、後続発話がその回答になるような共同発話文を検討したい。それは、どちらかが知っている内容について共同発話文が起きたと考えられる。例4に談話例を示す。

例4：（例3再掲）教職科目について

発話文番号	話者	発話内容
95	日本人4	はい、教職科目って言って（あー）、英語の教師になりたい人の、（うーん）ためのコースで、（あー）授業がやっぱり英語ですから、英、イギリスと（うん）アメリカとか（うんうんうん）、そういった関係が多くなってくるんです。
96	上級	あ、あの英語を教えー、る人は必ず英語、しっ専攻の人<でなくてもいい>{<}。［先行発話］
97	日本人4	<でなくてもいいです>{>}。［後続発話］
98	上級	あ、そうですか。
99	日本人4	はい。
100	上級	ふーん。
101	日本人4	でもその代わり他の語科から取ろうとすると（うん）、たっくさん授業取らなくちゃいけないですね。

日本人4は英語専攻ではないが、英語の教員になるために英語の教職科目を履修している。発話文番号95でその説明をし、96で上級話者が「英語を教える人は必ず英語専攻の人」と発話したとき、続けて97で「でなくて

もいいです」と音声を重ねて後続発話を発している。このような後続発話は、相手の先行発話を利用して自分の言いたいことを述べたようにみえる。しかし、先行研究に基づいて解釈すると、音声が重複していることで、日本人4は相手の発話に唱和しようと志向していたと考えられる。つまり、この97の後続発話は協調的なものであると解釈できる。また、日本人4が自分のよく知っていることについて述べる一方で、先の話者である上級話者は発話をやめずに予定通りの内容を言うという、菅原（1996）でも指摘された現象が現れている。

例5は日本人同士の会話で、自分の知らないことについて相手の発話を唱和する例が見られる。日本人1がポルトガルに旅行に行ったことがあると話し、母語話者はポルトガルの位置を尋ねている。

例5：ポルトガルの位置について

発話文番号	話者	発話内容
70	母語	ポルトガル、って、<笑い>どこだっけ?<照れ笑いをしながら>。
71	日本人1	あのー、ヨーロッパー、の、<いっちばーん西です>{<}。
72	母語	<あ、そうです、ヨーロッ>{>}、あー、そっかそっか。
73	母語	え、ドイツ??、とか［↓］。　［先行発話］
74	日本人1	よりももっ<と>{<}。　［後続発話］
75	母語	<と>{>}。
76-1	日本人1	《沈黙2秒》ドイツがあって、フラ<ンスがあって>{<},,　［先行発話］
77-1	母語	<フランスあってー>{>},,　［後続発話］
76-2	日本人1	スペインが<あって>{<},,　［先行発話］
77-2	母語	<あってー>{>},,　［後続発話］
76-3	日本人1	もう、一番端‘はじ’に。
77-3	母語	あっ、あ、そっかそっか。

ポルトガルの位置は、日本人１は知っているが、母語話者は正確には知らない場所である。母語話者の発話文番号73「え、ドイツ??、とか」という発話は、日本人1に対する質問の機能を果たしており、日本人1は母語話者の73の発話につなげて、74で「よりももっと」と答えている。これは例

4と同じ流れである。しかし、その後に発話の音声重複が起きなかった例4とは異なり、75で日本人1は「と」を繰り返し、音声的にも重ねている。その後、76-1で日本人1が「ドイツがあって、フランスがあって」と話し始めると、母語話者は77-1「フランスあってー」と音声的にはやや遅れて唱和を行う。そして、日本人1の76-2「スペインがあって」の発話に対しては、母語話者はスペインという国名を繰り返すことはせず、77-2で「あってー」を相手と同時に発話している。始めは「わからなかった」ポルトガルの位置であったが、相手とまったく同じことを復唱することで相手の発話に対する理解を示し、最後にきちんと唱和することで〈わかりあい〉の過程を経ようとしたと解釈できる。

さらに、この談話では76-1の発話の前に沈黙があり、会話の進行がやや滞っていた。初対面の会話では話題の進行に寄与する重複発話が多く見られることが内田（2016）で明らかにされており、この談話も同様のケースと捉えられるだろう。共同発話文は会話の進行性を回復する装置だという指摘に加え（森本2002）、音声重複という側面からも、会話の進行に重要な役割を果たしているといえる。

4.2.会話の進行性と「唱和」

質問に対する回答の後続発話がテンポよく続けられていても、唱和が起きなかった場合もある。例6は、日本人1が中国語の姓をすぐに理解できたことについて、中級話者が質問し、日本人1が回答した談話である。

例6：日本人1が中国語の姓を理解できた背景について

発話文番号	話者	発話内容
24	日本人1	あ、「中級話者姓」さんだとー…。
25	中級	そうそうそうそうそう（<軽く笑い>）、なんでー?。
26	中級	中国語学科?。［先行発話］
27	日本人1	ではないですけどー<笑い>。［後続発話］
28	中級	副専攻?。［先行発話］
29	日本人1	ではないんですけどね<2人笑い>。［後続発話］
30	中級	何で知ってるの?<笑いながら>。
31	日本人1	え、あのー、ゼミのー、（あー）心理学ゼミにいるんですけどー（はい）、大学院生にいますよ［↑］。
32	中級	誰<誰>{<}?。
33	日本人1	<同じ>{>}苗字のかた、多分。

自己紹介で中級話者のフルネームを聞いた後、日本人１は発話文番号２「あ、「中級話者姓」さんだとー」と中級話者の姓を正確に言う。中級話者の 25「そうそう」は、日本人１が中級話者の姓を正確に言ったことに対する反応であり、その後の「なんでー？」は、中級話者のフルネームを聞いて姓が理解できたことに対する反応だと思われる。中級話者は、それは日本人１に中国語の知識があるからだと思い、26 で「中国語学科？」と質問するが、日本人１は 27 ですぐに「ではないですけどー」と否定する。27 の否定を受けて中級話者はさらに 28「副専攻？」と再質問をし、日本人１はまた 29「ではないんですけどね」と答える。

発話文番号 26 ～ 29 では、中級話者の発話と日本人１の発話のやりとりに間が感じられないが、音声重複も唱和も起きていない。また、発話文番号 30 以降も、例５に見られたような、知らなかった側が相手の発話を繰り返すということは起きていない。これには２つのことが考えられる。ひとつは、中級話者の発話文が短い点である[7)]。一語文レベルであれば、上級話者のように、言おうとしたことを引き続き言うということは起こりにくく、音声重複を伴って相手の発話と同じ表現を発する可能性は低い。もうひとつは、中級話者が自分の知らないことを復唱する場合は、母語話者のように音声的に相手の発話に重なる場合が少ない可能性が考えられる。例えば､相手の発話を聞いてから復唱する場合は音声的には重なりにくい。

中級話者との会話で「唱和」が起きた例は以下の１例であった。例７は、日本と海外の風呂の形態を比較した後の会話である。

例７：温泉について

発話文番号	話者	発話内容
571	日本人3	やっぱいいな。
572	日本人3	お風呂いいや。
573	中級	おふ、温泉、す、温泉［つぶやくように］。
574	日本人3	温泉<好き?>{<}。　［先行発話］
575	中級	<好きー>{>}。　［後続発話］
576	日本人3	温泉行った?。
577	中級	行った行った<行った>{<}。
578	日本人3	<おっいいねー>{>}。
579	中級	んー。

発話文番号572までは、日本人3と中級話者は日本と台湾の風呂、特に湯船の違いについて話している。日本人は573で中級話者が「おふ、温泉、す、温泉」とつぶやいたことで、日本人3が「温泉好き？」と話題を変えた。中級話者は「温泉」というの後につなげて575で「好きー」と言い、ここで唱和が起こっている。573で中級話者は言葉探しのような発話をしており、会話の進行はやや滞る。そして、中級話者は、自分の次の発話を相手に重ねることで、この滞りを解消させたと解釈できる（森本2002、内田2016）。

おわりに

本稿では、共同発話文のうち音声重複が起きた部分について、音声重複の先行研究の一部に基づいて考察した。一見、理解の表示とは異なるような発話は「唱和」という観点によって協調的な言語行動と捉え直すことができる。そして、本稿で例に挙げた共同発話文の談話には、質問と回答の連鎖や、沈黙、言葉探し、など様々な要素が含まれる。会話に見られる現象をどの観点から分析し記述するかは、慎重に整理する必要があるだろう。

会話の基本情報という観点を分析対象と結び付けて考察することは、十分にはできなかった。母語話者同士の会話か非母語話者との会話かで音声重複の特徴が異なってくるのか、統計処理を行うこと、タイプの異なる会話を用いて定量的に分析することを続けたい。

記号凡例

。	1発話文の終わりにつける。
”	発話文の途中に相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつける。
、	①1発話文および1ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。 ②発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。
?	疑問文につける。
[↑][→][↓]	イントネーションは、特記する必要のあるものを、上昇、平板、下降の略号として、[↑][→][↓]を用いて表す。
/沈黙　秒数/	1秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。
<　>{<} <　>{>}	同時発話は、重なった部分双方を<　>でくくり、重ねられた発話には、<　>の後に、{<}をつける。また重ねた方の発話には、<　>の後に、{>}をつける。

[　　]	文脈情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように、特記の必要があるものなどを[　　]に入れて記す。
(　　)	短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、(　　)にくくって入れる。
<　　>	笑いながら発話したものや笑い等は、<　　>の中に<笑いながら>などのように説明を記す。
(< >)	相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(<笑い>)とする。
「　　」	トランスクリプトを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに用いる。

註

1) 共同発話文は研究者によって様々な呼び方が使われてきた。水谷(1993)の「共話」の他、「先取り発話」、「共同発話」、「引き取り」等がある(木林 2020)。本稿では、BTSJ の分析の単位である「発話文」という概念にならって「共同発話文」と呼ぶ。

2) 共同発話文に関する具体的な先行研究は木林(2020)と重なるのでここでは省略する。

3) ただし、菅原(1996)は、唱和とオーバーラップを厳密に区別することは難しいと述べている。

4) 発話文の認定や改行の原則について、評定者間信頼性係数(Cohen's kappa)を算出した(κ =0.86)。

5) 総発話文数の頻度と割合、話者交替数の算出には以下のツールを用いた。
宇佐美まゆみ(2019)「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット(2019 年改訂版)」『語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究』平成 30 年度～令和 4 年度科学研究費補助金基盤　研究(A)課題番号 8H03581)(研究代表者:宇佐美まゆみ)研究成果

6) BTSJ は「発話文」を分析の単位としており、木林(2020)ではこれに基づいて量的な分析を行った。本稿では、竹田(2016)がターン数に基づいて数値を出していること、及び、音声重複は一発話文のなかで複数行われる場合もあることから、話者交代数に基づいて量的な分析を行う。

7) 1.3 で述べたように、日本語母語話者と日本語中級話者の会話では一発話文が比較的短いという傾向がある。

引用文献

宇佐美まゆみ(2008)「相互作用と学習」『講座社会言語科学4　教育』pp.150-181.ひつじ書房
宇佐美まゆみ(2020)「基本的な文字化の原則(BTSJ)2019年改訂版」宇佐美まゆみ編『自然会話分析への語用論的アプローチ　BTSJコーパスを利用して』pp.17-42.ひつじ書房
木林理恵(2016)「会話の基本情報と音声重複から見る母語場面と接触場面の特徴」2016年度日本語教育学会研究集会　第4回北海道地区研究集会、2016年7月2日.

木林理恵(2020)「ディスコース・ポライトネス理論から見た共同発話文－ディスコース・ポライトネス理論が言語教育に示唆すること－」宇佐美まゆみ編『自然会話分析への語用論的アプローチ　BTSJコーパスを利用して』pp.43-70. ひつじ書房
串田修也(2006)『相互行為秩序と会話分析』世界思想社
菅原和孝(1996)「ひとつの声で語ること―身体とことばの『同時性』をめぐって―」菅原和孝・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』pp.246-287. 大修館書店
竹田らら(2016)「重複発話から創出される協調性―親疎が異なった日本語相互行為の異ジャンル間比較からの一考察―」『社会言語科学』第19巻第1号、pp.87-102.
西阪仰(1997)『相互行為分析という視点』金子書房
水谷信子(1993)「『共話』から『対話』へ」『日本語学』第12巻第4号、pp.4-10. 明治書院
森本郁代(2002)「発話権の尊重と会話進行－日本語母語話者と非母語話者の会話に見られる『引き取り』をめぐって－」『相互行為の民族誌的記述―社会的文脈・認知過程・規則―』平成11年度～13年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)) 研究成果報告書、pp.59-78.
Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation. Language , 50 (4), 696-735. (訳書『会話分析基本論集』世界思想社、2010年)
Sacks,H. (1992) Lectures on Conversation. 2vols. Oxford: Basil Blackwell.
Usami,M. (2002) Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness. Hituzi Syobo.